

## 12月16日（土曜）「わがセンスの学(楽)問のススメ」講演会アンケートについて

### 第1部講演「食の安全安心について改めて考えてみよう」 三宅 眞実 先生への質問と回答

○ 添加物についてなのですが、結局どうなの？と思う気持ちが拭いきれませんでした。国が OK 出しできるものは、毎日食べてもバカ食いしなければ気にしなくても良い、ということでしょうか。亜硝酸塩無添加のハム、ソーセージにしていますが、ソーセージ3本なら毎日食べても害ないのですね？ 国の基準を信じて間違いはないのですね？ 菓子パンの保存料も気になり買えないのですが、それも毎日食べるわけであれば、気にしなくて構わないのですね？ アスパルテーム、フェニルアラニンも気になります。

ご質問ありがとうございます。

限られた時間内の講演となり、十分説明できていない点はお許してください。ご質問の件ですが、簡単に答えるのは難しいと思います。私からお願いしたいのは、あくまでも判断はご自身でしてください、ということになります。私の話は、判断の一つの拠り所にしていただければと思います。

亜硝酸塩についても、アスパルテームについても、フェニルアラニンについても、国がグローバル基準に合わせた基準を設けて、それに充てて十分な安全性が認められることから食品への添加が認められているということです。国の判断については現時点で入手可能な限りの科学的根拠に基づいて判断されているので、私の立場としては、それを否定する情報がない限り、大きな問題はない、と考えています。これに対して、私の講演でもお話ししたように、さまざまな意見があることは承知していますし、おそらくそのような意見に影響されてご質問の方もある程度の心配をされているのだと思います。しかし、その意見（私にご質問の方がどのような意見に影響されたのか一つ一つを具体的に確認する術はありません）が本当に正しい根拠に則って主張されているのかについて、改めてお考えになるのも必要かもしれません。科学的・客観的に判断の上で、他人の意見にどのように対処されるか決めていただければと思います。ただしあくまでもリスクは0ということは、どんなものに対してもあり得ませんから、絶対大丈夫ということは私には言えません。ある程度のリスクは、他にも山のようにある「リスク」と比較しながら、受け入れるか拒絶するかを決めていただければと思います。

また、最後にお話ししたように、あくまでも国の基準は平均値に基づいています。ご質問の方が何らかの基礎疾患をお持ちであったり、平均的な消費者とは異なる食行動をされているなら、その点も考慮の上で（例えばかかりつけのお医者様に相談の上で）判断することが肝要と思います。

以上

事務局より：

なお、三宅先生から次のメッセージを頂きました。

食の安全に絶対はない、というと心配になる方もおられるかもしれません。しかし私たちは多かれ少なかれ、何らかのリスクと隣り合わせに暮らしています。それと比べれば、実は食品が原因で健康を害するリスクは、国等の規制があるおかげで非常に低く抑えられていると思っています。さまざまなことを、バランス感覚を持って判断することが、現代社会を心身ともに健康で生きる上で必要ではないでしょうか。

## 第2部講演「勇気をもって詩集を開いてみませんか？」 村田 正博先生への感想・質問と回答

(○囲い番号は、アンケート集計時での項目番号です。)

### ②良かった点について

○ 「詩の講義はこんないい方が日本にいることに救われた思いになりました。」

私のお話は、詩の表現に眼をこらし、詩の作者の思いをなるべく深く汲んで、会場の皆さんに、ほら、いかがですか？と提示させていただいたままで、「こんなにいい方」と仰るその言葉は、とりもなおさず「こんなにいい詩人が、こんなにいい詩が日本にあったのだ」ということですね。そのことに「救われた思いに」なっていただけたことを、ああ、今年の、いえいえ、生涯の幸せに存じます。ありがとうございます！

○ 「食の安全について、詩について、考えるきっかけとなり有意義な講義でした。」

「考えるきっかけ」、それを見つけていただく いとぐちとなることを念じて、30 数年の間、講義に励んできました。このお言葉をたまわり、学生諸君にも、そういう講義であり得たかな、と。どうだったでしょうね。

○ 「詩は自身の人生と重ねて共感したり気付かされたり身近にあるものだと教えていただきました。」

小説について述べられた文章ですが、詩にも通じると思いますので、中野重治(1902～ 1979、小説家、評論家、詩人)の言葉を一

… いったい何かの文学作品を読んで、それはどこの世界の話でもいい、とにかく読んだあとで、そのほっとした気持ちのなかで、自然にわが日本のことが考えられ、わが身のことが考えられて、そして何となく、他国もこうなのだナ、よその家族もこうなのだナ、よその人もこうなのだナと考えられ、それにそれぞれの後悔やら、口惜(くや)しさやら、よろこびやら、おれもいつまでこうしてはいられぬぞという気持ちやらにおそわれるとしたら、それはその人がその作品をほんとに読んだ証拠なのであって、それでこそその人はその作品を読んだということになるのだ。

(『本とつきあう法』、p.199-p.200、1987 年2月、ちくま文庫)

大学で講義をしていて、学生諸君に紹介したこの一節を思い出しました。そうなんです、そのとおりなんですね。

○ 「紹介された詩人の作品を読みます。若いときには気づかないこともあります。…」・「詩集を読んでみたくなりました」・「なかなか詩と触れる機会がなかったので、本屋さんで手にしてみたいなと思いました」・「詩集を読むハードルを下げてください…」・「詩集のお話が心にささる言葉が多くて書店に行きたくなりました。」・④のところで「村田先生への伝言詩集を開きたくなりました。」

うれしいです。ただ、長田弘さんや高田敏子さん、吉野弘さんの詩集の、そのすべての詩が、すぐに、すんと胸の中に届く一、というわけにはいかないかもしれません。私が詩に関心を深めるきっかけを作ってくくださったのは、井上靖(小説家、ですが詩集もあるのですよ)の講演記録「言葉の話」、岩波書店のPR 誌『図書』、1967 年2月号)なのですが(高校1年生の3学期、現代国語を教わったY

先生が、授業でその一節を読み聞かせてくださいました）、井上さんは、こんなことを仰有っています。

… 三好(達治)さんが詩集を何冊持っているか(出版しているか)わかりませんが、三好さんくらいの詩人でも、ほんとうにいい詩というのはそう沢山はないのではないかと思います。伊東静雄(上記Y先生の詩の先生です)でも同じことだと思います。まあ詩人が一生かかきまして幾つかの詩で人を感動させることができたなら、それはそれで満足しなければならぬと思います。なんでもない現象のなかからだれも気づかなかったものを発見して、引っ張り出す、そうしたことが二つでも三つでもできれば立派なものであります。ただそれが一生かかってもできないかもしれない。なかなかやっかいな仕事であります。

先週12月16日の講義に「勇気をもって詩集を開いてみませんか？」と、「勇気をもって」という言葉を入れましたのは、それでも、めげずに、詩人たちを支え・勇気づけてあげてほしい！という思いもこめてのことで、「本屋さんの詩集コーナーで」と申しましたが、それにはなにがしかの出費がともないますので、まずは、図書館の文学書のコーナー、詩集の本棚で、とお願いするべきでしたかね…

○ 「若いときには気づかないこともあります」・「この年になったからこそ、学ぶ楽しさ、専門外の学びの意味も理解できます」

まさに、そのとおりですね。「りんご」に食べ頃があるように、詩を読む、こちらにも読み頃があるようです。若い頃、50歳、60歳、70歳(現在の私)、そして未知の80歳・・・、きっと、見えなかったこと、気づかなかったことが、いくつも、いくつも・・・砂時計の砂がはやく落ちるようになって、豊かな毎日を過ごせるようになってゆくのではないかと、そう胸をときめかせております。

○ 「村田先生に泣かされました。」・「2講目はとにかく涙で…」

すみません、でも、パワーハラじゃないですよ。ただし、講義するものが泣いてはいけないと思っはいるのですが、それは、私には、無理なことで…

○ 「教養を受けるとは、こういう事なのだなあと思いました。」

そう受けとめてくださりまして、ありがとうございます。「教養」と「専門」とをどのように定義するか、むつかしいのですが、「教養」は生きてゆく知恵を、「専門」は社会における一定の役割を果たしリードしてゆくための知識を身につけるものだと考えて講義をしてきました。むしろ、専門科目の講義より教養科目(その「教養」という言葉も、現在では死語になりましたが)のほうが、予習がたいへんでしたね。

○ 「詩のお話も、全然敷居高なくて、…」・「詩集を読むハードルを下げてください…」

そうでなくっちゃ、ね。

○ 「特に若い頃に、先生方に出会ったり、授業を受けたりすることで、その後の人生は変わってくるのだろうな、おもしろいと思うもの、正しいと思うもの、美しいと感じるものが、違ってくるのだろうなと思いました。」

まさに、私が、そうでした。私の父は手描き友仙の職人で(友禅と書くのが一般ですが、手描きの職人さんには「友仙」と書く人が幾人もありました—、父の周囲だけかもしれませんが)、私も中学校を卒業したら、ある職人さんに丁稚奉公することに決められていました。しかし、高校にだけは行きたい、その願いを後押ししてくださる父の同業のおじさんが父を説得してくださって、高校に一。そこで、上記のY先生に教わって、大学に行きたい、文学の勉強がしたい、と。— あまりにも長い話になりますので、数ヶ月、我が家に暴風雨が荒れ狂ったとだけ申し上げて、ようやく、この道に入ることができたのでした。父のあとを継いでいても、いろんな師匠に教わり、導いていただいたことでしょう、それも、よかったですらうと思います。しかし、父には背きましたが、こちらの道もよかったですらうと思います。

○ 「2部の村田名誉教授のお話はとても興味深い内容でした。おもしろい上に心にしっかり届き、遠方から参加した甲斐があったと嬉しく思いました。」

そう言ってくださいますと、この講義をお引き受けして、数ヶ月、あれこれ詩集を開き、とりわけ高田敏子さんの詩は、在職中の講義ではふれたことがなく、その詩集や著書を買集め(インターネットのAmazon や「日本の古本屋」、さらにはヤフーオークションやメルカリで、毎日毎日、高田さんの著書が届くありさまで…)、どの詩を皆さんに読んでいただこうか、必死に(ほんとに必死に)準備をいたしましたので、ああ、よかったですら、と思わせていただくことができました。親に背いてまで、こういうことを仕事にしてきて、ほんとうによかったですら—。ありがとうございます。

#### ④講師への質問メッセージなど

○ 「村田先生への伝言：詩集を開きたくなりました。」

ありがとうございます！ 詩を書き、詩集を出しておられるかたに代わって深謝申し上げます。ただ、… 気がかりなことも… 上記②、四つめのところをご覧ください。

○ 「頂いた資料、大切にします。」

ありがとうございます！ 上記、②の最後のところに、資料づくりの苦辛をもらしました。ご覧ください。

事務局より：

寄せられましたアンケートの中に、方言(関西弁)に関するご感想と関連するご質問を頂きましたが、表現内容が方言(関西弁)に対する偏見を助長しかねないものであると判断いたしましたので、今回のホームページへの掲載は割愛させて頂くことと致しました。皆様のご深慮とご理解を賜りますようお願いいたします。